北海学園大学

日本語教員養成課程

『報告書』第 8 号

北海学園大学
2023 年 3 月

目　次

1. 2022 年度の日本語教員養成課程を振り返って　丸島　歩 …… 2

日本語ボランティア「たんぽぽ」での授業見学

2. 日本語ボランティア教室「たんぽぽ」に参加して得られたもの　新谷　光静 …… 3

3. 日本語ボランティア「たんぽぽ」での見学記録　阿久津　遥 …… 4

4. ボランティア「たんぽぽ」で学んだこと　森長　梨花 …… 5

5. 日本語ボランティア教室「たんぽぽ」でのオンライン授業を見学して　伊原　綾花 …… 6

札幌青葉鍼灸柔整専門学校ビジターセッション

6. 札幌青葉鍼灸柔整専門学校　留学生クラスでの日本語授業ビジターセッション見学を終えて　武田　唯 …… 7

EFL 科目担当講師への日本語レッスン

7. 日本語教授体験　青山　紘子 …… 8

8. レッスンの難しさ　吉川　真生 …… 9

報告

9. 国家資格「登録日本語教員」に対応したカリキュラム改訂に向けた受講生アンケートの実施と回答の傾向　丸島　歩 …… 10

2022年度の
日本語教員養成課程を振り返って

日本語教員養成課程委員　**丸島　　歩**

第８号では、いまだ新型コロナウイルス感染症の影響で、充分な現場での実践の機会が得にくい状況にありながらも、前向きに学習者や日本語教育の現場と向き合った、受講生たちの体験談をお届けします。

まずは、札幌市内で活動するボランティア市民団体の「たんぽぽ」でのレッスン見学やオンラインでの「おしゃべりサロン」への参加です。「たんぽぽ」ではコロナ禍でも、先生方のご尽力により一昨年度からオンラインでのレッスンが実施されてきましたが、今年度ようやく一部のクラスで対面レッスンが再開されました。これまでオンラインのレッスンの見学をさせて頂いていた本学の学生も、初めて対面でのレッスンを体験して、学ぶところが多かったようです。

７月には、札幌青葉鍼灸柔整専門学校の日本語授業へのビジターセッションに、１年生の学生が参加させて頂きました。初めて経験した日本語教育の現場に、たくさんの気付きがあったようです。

さらに、英米文化学科に所属する２名の４年生の受講生が、EFL（English as a Foreign Language）科目担当の講師への日本語プライベートレッスンに取り組みました。本人たちが意識していたかどうかわかりませんが、ニーズ調査やレディネス調査、カリキュラムのデザインもゼロから行う機会になっていたようです。１対１でのレッスンであったため、わからないことがあっても自力で解決しなければなりませんでした。教員にアドバイスを受けながら、学びながらレッスンを進めていくことは、社会的なリソースも生かしながら授業をブラッシュアップしていく、プロの日本語教師にも求められる姿勢だと思います。

受講生たちに様々な機会を与えて下さった日本語教育機関の先生方や、学習者の皆様に改めて感謝申し上げます。

また本課程では現在、文化庁を中心に創設に向けて進められている日本語教師の国家資格である「登録日本語教師」に対応したカリキュラム構築のために、調査や調整を行っています。本誌では、受講生を対象にしたアンケートの実施報告をまとめております。

〈日本語ボランティア「たんぽぽ」での授業見学〉

日本語ボランティア教室「たんぽぽ」に参加して得られたもの

人文学部日本文化学科３年　**新谷　光静**

我々 2020 年度入学生は、大学生活の中で、多大なコロナウイルスの影響を受けた世代でした。入学当初からオンライン講義が当たり前で、学習内容や、課外活動、留学などに大きな制限がありました。最近では、学外の活動も盛んになってきましたが、コロナ以前の大学生とは大きく異なった学生生活でした。そんな状況の中で得られた力、貴重な経験があります。

３年次の春から、日本語ボランティア教室たんぽぽに、学生ボランティアとして参加させて頂きました。春コースはオンラインでの遠隔授業で、複数人の先生方が用意してくださった教材を元に学習や、会話を行いました。この活動を通して一番実感したことは、学習者と円滑な日本語会話をすることの難しさでした。マンツーマンの授業ではないので、扱う教材を学習者全員が最初から理解できるということはほとんどなく、質問が多く出ました。先生方は、別の言葉で言い換えて、学習者が理解できるように説明していました。その説明を自分がさせていただく機会を何度か作って頂きましたが、中々伝えることができませんでした。何か相手の知らない内容を説明することは非常に難しく、一朝一夕でできるものではないと感じました。

秋コースでは、対面授業に参加し、初めて日本語学習者の方と実際に会う機会を得られました。画面越しでは分かりづらい実際の学習者の雰囲気、リアクションから、どんな内容に関心があるのか、どれほど理解できているかを把握しやすく、対面で行うメリットを感じました。最初は誰でも、学習者に合わせて話すことは困難であると思いますが、この活動の中で、大きく成長できたと確信しています。

たんぽぽに参加して、自分の中での日本語指導力、学習者との対話力など日本語教員になる上での力が磨けたと同時に、今後の人生においても生きる経験でした。先生方と毎授業終わりに、学習進行度の共有や次回授業の授業内容の選定を話し合うなどの反省会を行っていました。何かを行う上で、情報の共有や振り返り、次の活動への準備の作業が、質を高める要因であると学びました。これらは、日本語教育以外にも通ずることであり、日本語教育関連の進路に進まないとしても、大きな財産となります。この一連の知見も、自ら日本語教育に関心を持ち、積極的に行動したからこそ得られたものであり、コロナ禍という環境要因を言い訳にせず取り組んだことの成果であると考えます。

日本語ボランティア「たんぽぽ」での見学記録

人文学部英米文化学科３年　**阿久津　遥**

はじめに

本稿では、私が見学させていただいた日本語ボランティアたんぽぽさんの春コース（2022年5月～6月・計８回）を通して学んだことをまとめたいと思います。私が参加させていただいたのは、対面での中級コースでした。毎週学習者数は変動しますが、平均3、4名の方に対し、ベテラン講師の方が、その日来た学習者のレベルを見て授業を進めていたことが印象的でした。

活動の流れ

まず初めに、その日行う授業の教案説明から始まります。時間配分の設定について、教える項目とそれを選んだ理由について、どの教材をなぜ選んだのか等、学生である私も勉強になるお話を聞けました。また前週に来た学習者のレベルを見て、常に教案や教え方を変更していたのが印象深く、教える側はより柔軟な対応を常に求められているのだと改めて感じました。

その後学習者の方が集まると、授業を開始します。授業は大体アイスブレーキングで日本の文化や出身国の文化についてのコミュニケーションを行い、次に文法、練習、発表、まとめの順番で進められていました。

回数を重ねるにつれて、先生たちの計らいにより学生アシスタントが学習者と会話をする機会が増えました。そのため徐々に学習者にとってもより実践的な会話を練習する場が増えたと思いますし、私にとっても日本語学習者とどのように会話をすればよいのか実践的に学べました。

授業が終わると、その日の反省会が行われます。先生方は学生である私の意見や感想も積極的に聞き出してくれたので、発言しやすかったです。また私が言った意見のフィードバックを直接もらえるため、視野が広がりとても勉強になりました。

おわりに

このボランティア活動では、実践活動を経て日本語学習者との会話の仕方を学び、ベテラン講師の指導の元で授業の進め方や、準備の仕方を学びました。一貫して感じたことは、対ヒトの作業である日本語教育において柔軟性と振り返りをしっかり行いブラッシュアップを続けることがより良い授業を行うために必要不可欠なのだと感じました。またそのため学習者が異なれば全く異なる授業が展開される面白さがあると全授業を通して知りました。

〈日本語ボランティア「たんぽぽ」での授業見学〉

ボランティア「たんぽぽ」で学んだこと

人文学部英米文化学科３年　**森長　梨花**

特に今ではあまり話題にならなくなったとはいえ、新型コロナウイルスにより「日本語教育特別演習」ができなくなった私は、日本語教育養成課程で募集されている「たんぽぽ」というボランティアに積極的に参加させていただきました。きっかけは元々日本語教師になりたく入った学校だったので、せっかくの大学生を無駄にしたくないと思ったのと同時に、実際に教えている現場を今のうちに見ておかないと、いざ日本語教師になった際にどうやって教えていけばいいのかわからなくなってしまわないようにしたいと思ってボランティア活動をしたいと考えたため、参加を決意しました。

たんぽぽの活動内容としては２つのパターンがあります。（春、秋、冬コースがあって回数はその都度変わるのですが、基本的には 4〜8 回ずつ、１週間に１回か２週間に１回のペースで授業が構成されています。）

１つ目は、オンライン（Zoom）にて学習者と TA（教師）の顔を映し合って１つのお題で１時間半、お互いの意見や自国の思い出などを出し合っていく活動です。例えば、自国の学校での制服について話し合ったことが一番印象に残っています。一通り押さえておきたい文法や表現を 30 分くらい学習した後に学習者と TA を振り分け、ブレイクアウトルームに入れてそのお題について時間をとり、話し合うというものです。学習者の人数が少人数のため、１人１人十分な時間をとってお題について話すことができることや、オンラインということもあり教室を必要としないため、時間を指定しておけばどこでも授業ができるのが、オンラインの強みであると考えます。

２つ目は、対面にて学習者の語彙や文法を、実際の教科書と黒板を用いて１時間半勉強する活動です。対面授業に関しては、私たちが通っていた学校の英語を勉強しているような感覚でした。この活動は、実際に自身も TA として教科書の内容を学習者に教えることができる実践型のボランティアでした。実際に教えることもあり、学習者にわからなかったと言われないように教案もしっかりと用意する必要がありますが、教えた単語や文法を使ってもらえた瞬間に達成感を感じます。

この経験を経て、日本語教育という職業を身近に感じることができました。今回のボランティアでは、主に日本に住んでいる外国人を中心に教えてきましたが、自国で学習する学習者にも日本語を教えたいです。

日本語ボランティア教室「たんぽぽ」でのオンライン授業を見学して

人文学部日本文化学科１年　**伊原　綾花**

2023年の春休み、私は毎週行われている日本語ボランティア「たんぽぽ」のオンライン授業を見学させていただきました。日本語教育の現場に参加するのは初めてだったので、驚きと発見がたくさんありました。

「たんぽぽ」ではオンラインの場合、その日の担当教師（T）と、サポートで入るアシスタント教師（TA）約10名のチームで授業を進めます。始まりは、担当教師の方がスライドを使いながら、授業全体で扱うトピックについて、クイズや雑談のような入りこみやすい工夫を交ぜて展開していました。学習者が授業で使う言葉を理解できているか確認する際も、明確な答えは決めずに、その言葉のニュアンスや使う場面を推測して話してもらい、その意見すべてを否定せずにフォローしていました。また、一通りその日に使う文法や単語を理解した後で、学習者がTAとの会話を通してアウトプットするグループワークの時間を必ず作っていました。失敗を恐れずに日本語でコミュニケーションをできる場があることで、学習者の自信やモチベーションにつながっていると感じました。全体を通して、学習者が楽しみながらも学習内容についてこられるような工夫が凝らされた授業でした。そして、授業後には、学習者一人一人の出来具合と難易度が合っていたかどうか、改善点などを全員で話し合う反省会がありました。次回の授業がさらによいものになるような試行錯誤がこれまでも重ねられてきたからこそ、充実した授業ができているのだと思いました。

コロナウイルスも落ち着き、対面とZoomで交互に授業を行っていましたが、対面ではなかなか学習者の方が来られなかったため、Zoomの利点を実感しました。見学する前までは、対面と違って学習者の方が質問をしづらい、リアクションがわかりにくいといったイメージがありました。しかし、実際は対面と変わらないくらい積極的なコミュニケーションが行われていました。それは、授業の始めからアイスブレイクのような会話があったり、チームだからこそできる話しやすい雰囲気づくりをしていたりしたことが大きいと思います。

「たんぽぽ」での体験は、オンラインツールを利用した日本語教育に興味を持つきっかけにもなりました。教える側の工夫によって、対面と変わらない充実した授業にすることができるということを学んだので、オンラインをうまく活用した日本語教育について考え、自分でも実践したいと思いました。

〈札幌青葉鍼灸柔整専門学校ビジターセッション〉

札幌青葉鍼灸柔整専門学校 留学生クラスでの日本語授業 ビジターセッション見学を終えて

人文学部日本文化学科１年　**武田　　唯**

2022 年（令和 4 年）7 月 22 日、札幌青葉鍼灸柔整専門学校の留学生クラスで行われたビジターセッションに参加しました。私は、日本語教育の現場を実際に訪れたのは今回が初めてでしたので、多くのことが学べた貴重な体験をさせていただきました。

ビジターセッションは留学生の方々がいくつかのグループに分かれ、自分たちの国について日本語でプレゼンテーションし、参加者が簡単な質問をするという流れで行われました。発表では民族衣装を着用し、ギターで弾き語りをするなど、グループごとに個性豊かな創意工夫が行われ、非常に楽しく拝聴することができました。

私は質問の際に、なるべくゆっくり、はっきりと発音しできるだけ簡単な日本語を使用することを意識しました。しかし、分かりやすい単語を選択することは想像以上に難しく、言葉が詰まってしまう場面が多々ありました。また、緊張と焦りもあり早口になってしまったと思います。それゆえ、自分の言葉に自信が持てず、積極的な発言ができなかったと反省しています。普段意識せずに使用している日本語を、日本語学習者に伝えることの難しさを実感しました。

プレゼンテーションが終了した後には、個別の交流時間が設けられ、留学生の方と実際に会話をすることができました。発表が終わったことで、互いにリラックスした状態で話すことができました。言葉が思いつかない場合でも、何を伝えたいのかを英語やジェスチャーから汲み取ることで、正しい日本語表現を教えることができました。留学生の方と円滑なコミュニケーションができたことはとても嬉しく、自信につながりました。

私は日本語教育への基本的な知識と経験が乏しいため、今回の体験を通じて、自分が日本語を教える立場としては実力不足であることを再認識し、反省点と今後の学習への課題を得ることができました。ですが、実際にコミュニケーションをとったことで日本語教えることの喜びを知ることができたのはとても良かったです。

またこのような異文化交流の機会があれば是非、参加したいと思います。

日本語教授体験

人文学部英米文化学科４年　**青山　紘子**

私は北海学園大学にいらしたばかりの英語の先生に日本語を教えるという体験をしました。その体験の中で、母語としての日本語と学習者としての日本語は全く異なることを学びました。

初めは、日本語教員養成課程を履修しており、日本語が母語なので大丈夫だろうと思っていましたが、想像と全く違いました。日本語学習者の疑問に答えることができませんでした。なぜそうなるのか、どうやって使い分けているのかといったことを考えず、何気なく使っている日本語は本当に奥が深かったです。

先生と勉強していくなかで、日本語の使い方・書き言葉と話し言葉での音の違いなどの質問を受けました。言われてみて初めて気づく日本語の難しさが多くありました。

また、自分が日本語の文法を深く理解できておらず、文法を説明すればするほど複雑になってしまうこともしばしばありました。さらに、自分は簡単だろうと思っている内容であっても学習者にとっては難しく、いきなり難しい内容を教えてしまうこともあり、先生には本当に申し訳なかったです。そんな時には、日本語教員養成過程で指導して頂いた先生や日本語が話せる英語の先生にアドバイスをもらいました。そして、日本語を教える時には英語で説明することも必要となってきましたが、英語力も足りずなかなかうまく説明することができませんでした。日本語教員は日本語について知っているだけではなく、英語も必要となってくるのだと感じました。

この体験を通して母語だからといって必ず教えられるわけではなく、母語だからこそ、意識的に勉強する必要があるのだと実感しました。また、ステップを踏んで教えること、授業の進め方のテンプレートを用意することなど、日本語に関してだけでなく、先生として授業をするときに大切なことを学ぶことができたと思います。

日本語を教えるというよりも、先生と日本語を一緒に勉強させていただきました。たくさん間違えてしまい、混乱させてしまったのにもかかわらず、先生はいつも私の話に耳を傾けてくれて、頑張ろうと思えました。一緒に勉強してくれた先生、サポートして頂いた先生には感謝しかありません。

この体験をできたことで、日本語教員とはどのようなものなのか、日本語とは何か、を学ぶことができたと思います。このような経験ができてとてもよかったと感じています。

レッスンの難しさ

人文学部英米文化学科４年　**吉川　真生**

「大学で英語を教えている先生が、日本語を勉強したいので教えてくれる学生を探している」という連絡を丸島先生からいただき、私はその方に連絡を取ってみました。そこから週に１度か２度会って大学で日本語の勉強をするようになりました。先生の補助というかたちで授業に参加した経験はありましたが、自分が先生役になり勉強を進めていくのは初めてでとても難しかったです。まず、その人が目指したいレベルと今できているレベル、そこを考えて授業を進めていかなければいけません。また、経験値がない私はどのようなところが理解しにくい点であるのかを予想できず、勉強会に臨むための事前準備に時間を要しました。授業での質問などに対して、「これはどんな違いがあるのか？」「どんな意味なのか？」ということを英語で伝えなければならないことが多かったので、自分の英語のレベルも上げなくてはいけないということも実感しました。

はじめの頃は、質問を受けたときにすぐに答えられるものと答えられないものがあり申し訳ない気持ちでいっぱいでした。しかし丸島先生に相談すると、「その場で説明できる内容以上が必要になった場合は、宿題として考えてきて次の回に答えを伝えるという方法でもいいと思う」と教えてくださり、そこから私の中で少し余裕を持って行うことができるようになりました。

毎回、前回の復習をしてから新しいところに入っていたので、そのときに説明できなかったところや苦手としていたところを重点的にやり進めていくことができました。だんだんと「わかる！ああ！！」というような表現をしてくれることが回を重ねる毎に増えてきたのが嬉しかったです。

４年生の後半にはアルバイトが忙しくなってしまったり、自分の受験があり授業をすることが難しくなっていきましたが、このような機会に巡り会え、取り組みを行えたことで、自分の経験となり学ぶ点が多かったです。楽しみにしていた海外実習には行けませんでしたが、同じような体験ができたのでとても良かったです。丸島先生のおかげで制限された中でも時間を無駄にすることなく過ごせたことを感謝しています。卒業後の進学先でも日本語教育に関わりながら過ごせたらいいなと思っています。

〈報　告〉

国家資格「登録日本語教員」に対応したカリキュラム改訂に向けた受講生アンケートの実施と回答の傾向

日本語教員養成課程委員会　**丸島　　歩**

1. はじめに

2020年7月～21年7月に行われた文化庁の「日本語教師の資格に関する調査研究協力者会議」において、日本語教師の国家資格「登録日本語教員」の制度とその資格取得要件等が提示され、2022年5月～23年1月に「日本語教育の質の維持向上の仕組みに関する有識者会議」において日本語教師養成機関に関する検討が行われた。

この動きを受けて、本学の日本語教員養成課程でも、現在国家資格に対応したカリキュラム改訂に向けて調整や調査を行っている。その一環として、受講生に向けてアンケートを実施した。現在の本学の課程の受講生は9割以上を人文学部生が占めている。本課程の開講科目の全てが人文学部の卒業要件単位に含められること、人文学部生からは受講料を徴収していない[1]ことなどから、日本語教育にそれほど高い関心がない学生も多く受講していると思われる。しかし、今後国家資格に対応したカリキュラムを実施することになれば、受講生の学習量の増加、実習の金銭的・時間的な負担の増加が予想される。また、大学の養成課程を修了しても試験が課される可能性が高い[2]。

これらのことから、現在よりも受講を希望する学生が減少することが考えられる。また、これまで以上に受講生一人ひとりに対するきめ細やかな教育が必要となる一方で、そこに投入できる人的資源は限られていることから、一部の科目の開講区分を変更するなど、新たに受講条件を設ける必要が生じる可能性もある。効果的かつ効率的な課程運用のためには、受講生の日本語教師資格に対する考えを把握する必要があると考え、アンケートを実施することとした。本稿では、その実施概要とその結果について報告する。

まず、現在の受講生が将来的に国家資格の取得を考えているかを問うた。次に、国家資格創設後に日本語教員養成課程の受講を検討すると仮定して、現在の課程に対して以下のような条件が課された場合に、受講をするかどうかを問うことにした[3]。これらの条件は国家資格に対応したカリキュラムにおいて必要となる可能性が高いものや、課程の運営上必要になる可能性があるものである。

1　人文学部以外に所属する学生は、2022年度現在、30,000円の受講料を徴収している。

2　「日本語教育の質の維持向上の仕組みに関する有識者会議（第8回）」で配布された「「日本語教育の質の維持向上の仕組みについて（報告）」（案）」では、大学等を含む指定日本語教師養成機関の課程等を修了した者は筆記試験の一部を免除する案が示されている。

3　「（受講を）する」「たぶんする」「たぶんしない」「しない」「わからない」の5つの選択肢を設けた。

●教育実習に必要な時間や作業量の増加
●教育実習費の負担（数万円程度）
●課程の必修科目のうち、6 単位程度が卒業要件に含まれなくなる[4]
●課程の必修科目のうち、10 単位程度が卒業要件に含まれなくなる
●資格取得には試験の合格が必須となる

2. 方法

アンケートは本学の日本語教員養成課程を受講している 151 名を対象に、本学で利用している LMS（Learning Management System）「manaba」のアンケート機能を用いて行った。設問の一覧は、稿末の資料を参照されたい。回答の受付は 2022 年 7 月 8 日に開始し、「manaba」のコースニュース機能を用いて受講生にアンケート協力の依頼を行った。2023 年 1 月 30 日までに回答されたものについて分析を行った。回答者数は 63 名（41.7%）である。

3. 結果

3-1　将来の国家資格取得の意志

受講生が将来国家資格を取得する可能性について問うたところ、以下の図 1 のような回答が得られた。将来の資格取得を考えていると回答したのは 63 名中 17 名で、回答者の 27.0%である。最も多いのが「資格取得の難易度や負担による」と回答した 27 名（42.9%）であった。また、「修了後のキャリアによる」と回答した者も 16 名（25.4%）で、ほとんどの回答者が現状においては、国家資格の取得を決めかねていることがわかった。

文化庁の「日本語教師の資格に関する調査研究協力者会議」、「日本語教育の質の維持向上の仕組みに関する有識者会議」においては、繰り返し現職の教師や現行制度での有資格者に対する移行措置について議論がなされてきた。移行措置については現在も検討がされており、現行の本課程修了者が国家資格取得に必要な要件については今後も動向を注視していく必要がある。

---

[4] 人文学部以外の学生と科目等履修生については、もともと卒業単位に含まれない科目を多く履修する必要があったり、課程修了のためだけに多くの科目を履修しなければならないため、「人文学部以外の所属・科目等履修生」という選択肢を設けている。

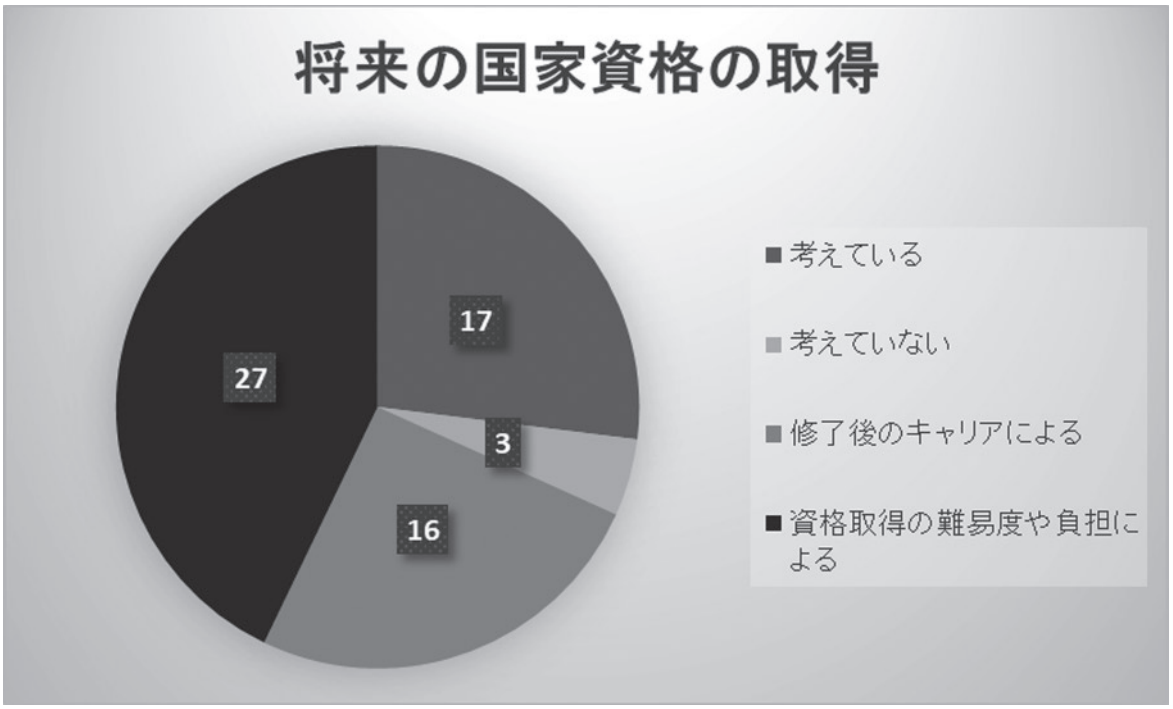


図 1　将来の国家資格の取得可能性

3-2　国家資格制度施行後を想定した場合の受講可能性

次に、国家資格制度実施後に日本語教員養成課程の受講を検討すると仮定[5]して、現行の課程と比較して「教育実習に要する時間や手間の増加」「数万円程度の教育実習費の負担」「卒業要件外の単位（6 単位程度）」「卒業要件外の単位（10 単位程度）」「試験合格が必須条件」のような資格取得の条件が加わった場合にも、課程を受講するかについて質問した。その結果は、以下の図 2 のとおりである。

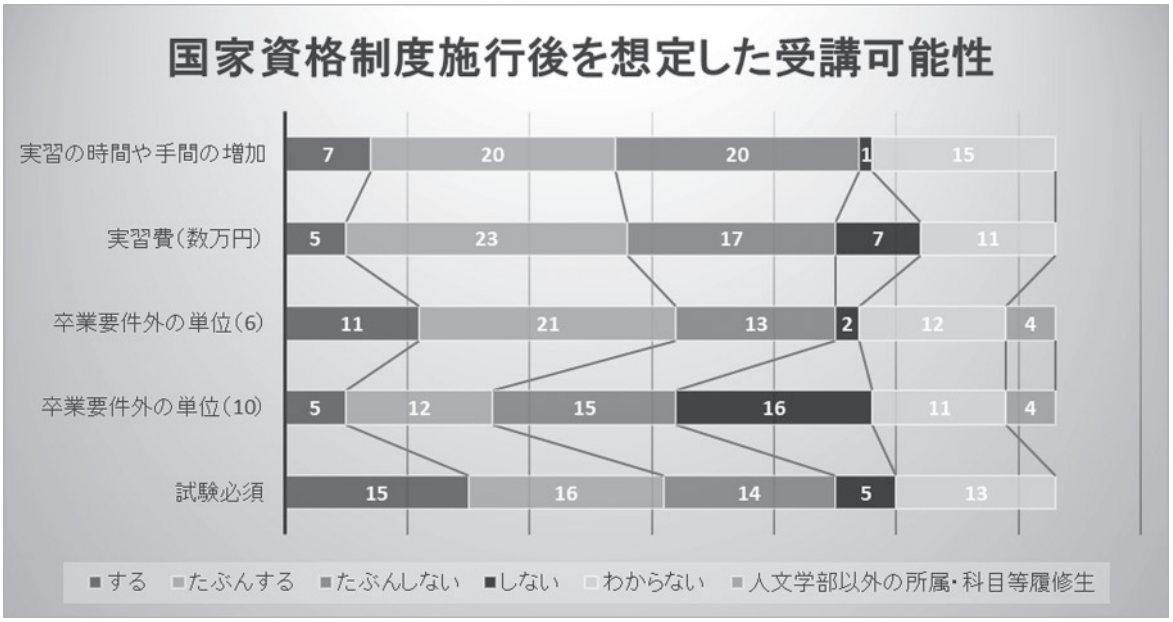


図 2　国家資格制度施行後を想定した場合の受講可能性

[5] 現在の受講生は、課程修了時には現行の制度での修了書が与えられる。ここでは、「あなたが国家資格創設後に課程の受講を検討する場合」を想定して、回答してもらった。

受講に最も影響がないと思われるのが「卒業要件外の単位（6 単位程度）」と「試験合格が必須」であるが、受講を「する」「たぶんする」と回答したのは半数程度に留まっている。残りの半数程度は受講をしなかったり躊躇したりすると思われる。また、そもそもこのアンケートには受講生全体の 4 割程度しか回答しておらず、回答した受講生は比較的課程の受講に対して積極的な者が多いと考えられることから、実際はこれらの条件が課された場合には受講希望者が現在の半数を大きく下回る可能性も十分に考えられる。「登録日本語教員」資格取得のためには大学の養成課程を修了しても試験の一部を受験、合格することを求められる可能性が高いことから、国家資格制度施行後はかなりの受講生の減少が予想される。

また、「教育実習に要する時間や手間の増加」については、受講を「する」「たぶんする」と回答したのは 27 名（42.9％）にとどまっている。国家資格取得に求められる教育実習の学習量は現在よりも増加することが予想されることからも、実習の負担が増加することで受講希望者は大きく減少すると思われる。

「数万円程度の教育実習費の負担」については、受講を「する」「たぶんする」と回答したのは 28 名（44.4％）であった。安定して国家資格の要件を満たす教育実習を行うためには、外部の教育機関での教壇実習が必要となる可能性が高いが、その場合には受講生の費用負担が必要となることが考えられる。この回答の結果から、金銭的な負担が増えることで受講を諦める者が少なくないことが示唆された。

最も受講に影響が大きいと思われるのが「卒業要件外の単位（10 単位程度）」であった。受講を「する」「たぶんする」と回答したのは 17 名（27.0％）にとどまり、人文学部に所属する受講生にとっては一定以上の履修負担は避けたいという考えを持つ者が多いことがうかがえた。履修負担の大幅な増大によって日本語教員養成課程の履修をしない、もしくは躊躇する学生の中には、教職課程や学芸員課程、図書館学課程など、他の課程も受講している学生が含まれている可能性もある。

3-3　複合的な分析

3-2 節において、国家資格制度施行後に想定されるカリキュラムにおける受講条件に対して現在の受講生がどのように考えるかについて、その概要が確認できた。しかし、これらの条件は単独で適用される可能性は低く、カリキュラム運営上も複数の条件を設ける必要が生じることも充分に考えられる。国家資格に対応したカリキュラム構築に向けて、現行のカリキュラムを大幅に見直す必要が生じた場合に、どの程度の学生が受講を希望する可能性があるかを、ある程度予測しておく必要があるだろう。そこで、非常に実現可能性の高い「試験合格が必須条件」とほかの条件を組み合わせ、クロス集計表を作成した（表 1～4）。なお、回答者全体の 20％を超える項目の数字は太字にし、下線を付してある。

表 1 では、「試験合格が必須条件」「教育実習に要する手間や時間の増加」を合わせた集計を行った。二つの条件のどちらでも受講を「する」「たぶんする」と回答したのは 19 名（30.2％）にとどまった。

表 1　クロス集計表①（試験合格が必須条件×教育実習に要する手間や時間の増加）

		手間や時間			
		する、たぶんする	たぶんしない、しない	わからない	合計
試験必須	する、たぶんする	19	3	9	31
	たぶんしない、しない	6	12	1	19
	わからない	2	6	5	13
	合計	27	21	15	63

表 2 では、「試験合格が必須条件」「数万円程度の教育実習費の負担」の 2 条件で集計を行った。どちらの条件でも受講を「する」「たぶんする」と回答したのは 21 名（33.3%）であった。

表 2　クロス集計表②（試験合格が必須条件×数万円程度の教育実習費の負担）

		実習費（数万円）			
		する、たぶんする	たぶんしない、しない	わからない	合計
試験必須	する、たぶんする	21	5	5	31
	たぶんしない、しない	3	14	2	19
	わからない	4	5	4	13
	合計	28	24	11	63

表 3 では、「試験合格が必須条件」「卒業要件外の単位（6 単位程度））」の 2 条件を組み合わせて集計を行った。どちらの条件においても受講を「する」「たぶんする」と回答したのは 22 名（34.9%）であった。

表 3　クロス集計表③（試験合格が必須条件×卒業要件外の単位（6 単位程度））

		卒業要件外の単位（6）				
		する、たぶんする	たぶんしない、しない	わからない	他学部・科目等履修生	合計
試験必須	する、たぶんする	22	2	4	3	31
	たぶんしない、しない	6	10	3	0	19
	わからない	4	3	5	1	13
	合計	32	15	12	4	63

表 4 では、「試験合格が必須条件」「卒業要件外の単位（10 単位程度））」の 2 条件で集計を行った。どちらの条件においても受講を「する」「たぶんする」と回答したのはわずか 13 名（20.6%）であった。

表 4　クロス集計表④（試験合格が必須条件×卒業要件外の単位（10 単位程度））

		卒業要件外の単位(10)				
		する、たぶんする	たぶんしない、しない	わからない	他学部・科目等履修生	合計
試験必須	する、たぶんする	13	10	5	3	31
	たぶんしない、しない	3	15	1	0	19
	わからない	1	6	5	1	13
	合計	17	31	11	4	63

これらの条件のうち、「教育実習に要する手間や時間の増加」「数万円程度の教育実習費の負担」「試験合格が必須条件」の 3 条件については、国家資格制度の要件等の外部要因によって課されたり、課す必要が生じたりする可能性が高いものである。「卒業要件外の単位」については、より質の高い日本語教師の育成や綿密なキャリア教育のために、課程の運営上必要となる可能性がある、いわば内部要因によって設定される得る条件であると言える。

前者の 3 つの条件のすべてで受講を「する」「たぶんする」と回答したのは 17 名（27.0%）で、そのうち「卒業要件外の単位（6 単位程度）」で受講を「たぶんしない」「しない」と回答した者は 1 人もいなかった。「わからない」と回答したのも 1 名で、13 名は「する」「たぶんする」と回答し、残りの 3 名は人文学部以外の学生か科目等履修生で、そもそも課程修了のためだけに多くの科目を履修しなければならない受講生である。また、この 17 名のうち「卒業要件外の単位（10 単位程度）」で受講を「する」「たぶんする」と回答したのは 8 名（12.7%）にとどまった。

以上のことから、国家資格要件やそれに伴う外部要因によって、複数の条件が課されたと仮定した場合でも課程を受講する可能性が高いのは、回答者のうち 3 割前後の受講生である。前述したように、このアンケートに回答した受講生は全体の 4 割程度にとどまることから、実際には全体の 3 割を大きく下回る可能性が高い。また、外部要因によってカリキュラムを大幅に変更した場合に、開講科目の区分を変えることには、少なくとも受講生のスクリーニングという観点では、極端な変更（10 単位を超える科目を卒業要件に加算されない科目区分とするなど）をしない限り、あまり影響はないものと思われる。

4. おわりに

国家資格制度に対応したカリキュラム改訂のための現状把握として、現在の受講生に対してアンケートを行った。回答した受講生は全体の半数以下にとどまり、比較的意欲的な受講生が回答したと思われるものの、修了や資格取得の要件が厳しくなった場合でも受講を前向きに考える回答者はそれほど多くなかった。このことは、より質の高い日本語教師を養成するという国家資格の目的に鑑みれば、決して悲観すべきことではない。日本語や日本語教育、外国語教育に関心のある幅広い学生の意欲には応えつつ、将来的に日本語教師を職業として選択することを考えている学生には集中した教育を行う体制を整えていく必要があるだろう。

また、アンケートの最後に設けた自由記述の設問では、修了後に国家資格取得に必要な学修のための科目開講を希望する回答もあったことから、これまでの修了生のサポートが必要になる可能性

もある。今後の資格制度の動向にも注目しつつ、必要な情報収集を行いながら、カリキュラムの改訂、整備を行っていきたいと考えている。

〈資料〉アンケート回答画面

報道等ですでに知っている方もいらっしゃることと思いますが、早ければ2024年度より、国家資格である「登録日本語教員」制度が施行される可能性があります。
本学も将来的にこの制度に対応することを視野に、カリキュラムの改訂を計画しています。
（現在課程を受講している方は、現在のカリキュラムで受講し、修了時には現行の修了証が授与されます）

※現行の日本語教師資格（本学の日本語教員養成課程の修了証を含む）に関しては、当分の間移行期間が認められる見込みです。また、修了後に国家資格を取得したい場合も、一部の試験が免除される可能性もあります。
また国家資格制度については不透明な部分が多いのですが、相談がある方（特に修了後に日本語教員資格を活用しようと考えている方）は[redacted]までご連絡ください。

つきましては、現在の課程を受講している皆様のお考えを伺いたく、アンケートを実施します。
ご協力をお願いいたします。

A：あなた自身についての質問

将来的に日本語教師の国家資格の取得を考えていますか。(選択必須)

1.1

1. ○ 考えている
2. ○ 考えていない
3. ○ 修了後のキャリアによる
4. ○ 資格取得の難易度や負担による

B：国家資格創設後を想定した質問

国家資格の創設は、日本語教育全体の質を上げることがその目的の1つです。
国家資格に対応したカリキュラムは、様々な面で現行のカリキュラムよりも履修の負担が増えることが予想されます。特に、教育実習の負担が大幅に増えることが予想されます。
以下の設問では、**「あなたが国家資格創設後に課程の受講を検討する場合」**を想定してお答えください。

・国家資格に対応したプログラムでは、5名以上の学習者の前での教壇授業実習を2コマ以上（1コマあたり45分以上）、単独で実施しなければならなくなる見込みです。
また、教壇実習以外にも、事前の模擬授業や、授業見学を行う必要があります。
当然のことながら、実習の準備にかける時間や手間は大幅に増えることになります。

・国家資格に対応したプログラムでは、5名以上の学習者の前での教壇授業実習を2コマ以上（1コマあたり45分以上）、単独で実施しなければならなくなる見込みです。
また、教壇実習以外にも、事前の模擬授業や、授業見学を行う必要があります。
当然のことながら、実習の準備にかける時間や手間は大幅に増えることになります。

もし、教育実習に関わる時間や手間が大幅に増えた場合、あなたは日本語教員養成課程を受講しますか。(選択必須)

1.2
1. ○ する
2. ○ たぶんする
3. ○ たぶんしない
4. ○ しない
5. ○ わからない

教育実習費（数万円程度）が必ずかかる場合、あなたは日本語教員養成課程を受講しますか。(選択必須)

1.3
1. ○ する
2. ○ たぶんする
3. ○ たぶんしない
4. ○ しない
5. ○ わからない

・現在のカリキュラムは、すべての科目が一般教育科目と人文学部の専門科目で構成されています。
人文学部生であれば、科目の履修を工夫することで、すべての科目を卒業要件に含めることができます。

もし、必修科目のうちの6単位程度が卒業要件に含まれない科目になった場合、あなたは日本語教員養成課程を受講しますか。(選択必須)

1.4
1. ○ する
2. ○ たぶんする
3. ○ たぶんしない
4. ○ しない
5. ○ わからない
6. ○ 人文学部以外の所属・科目等履修生

もし、必修科目のうちの10単位程度が卒業要件に含まれない科目になった場合、あなたは日本語教員養成課程を受講しますか。(選択必須)

1.5

回答画面の並び

1. ○ する
2. ○ たぶんする
3. ○ たぶんしない
4. ○ しない
5. ○ わからない
6. ○ 人文学部以外の所属・科目等履修生

・国家資格を取得するためには、大学の課程を修了するだけではなく、試験に合格することが求められる見込みです(一部の試験は免除されます)。

資格取得のために、課程の修了だけではなく試験の合格が必要になった場合、あなたは日本語教員養成課程を受講しますか。(選択必須)

1.6

1. ○ する
2. ○ たぶんする
3. ○ たぶんしない
4. ○ しない
5. ○ わからない

・ほかにご意見やコメントがありましたら、お知らせください。

1.7

ご協力ありがとうございました。

北 海 学 園 大 学
日本語教員養成課程報告書　第 8 号

編　集　北海学園大学日本語教員養成課程委員会　（委員長　丸島 歩）
発行日　2023 年 3 月 31 日
発　行　北海学園大学日本語教員養成課程委員会
〒 062-8605　札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号
TEL（011）841-1161（内線）2295（丸島研究室）／ FAX（011）824-7729

